

広土会新聞

第16号

2012.3.1 発刊

発行所 広島工業大学 広土会
〒731-5193 広島市佐伯区三宅2丁目1-1
TEL 082-921-3121

巻頭言



広土会会長
島 重章

我が国は、その位置、地形、地質、気象などの自然条件から、地震、台風、豪雨、火山噴火などによる災害が発生しやすい国土となっています。この言葉は我が国の防災白書の巻頭に書かれた文言であり、まさに的を得た言葉であります。

昨年の1年間は、1月末から継続している霧島山新燃岳（九州）の噴火災害をスタートに、3月11日はM9という未曾有の大地震とそれに伴う大津波の襲来（東日本大震災）、それに追い打ちをかけた福島原発の大惨事、夏場は梅雨前線による紀伊半島の集中豪雨と土石流による自然ダムの恐怖、冬場には年末から今年の1、2月に連続的に北日本の豪雪被害と、局地激甚災害が各都市への大被害を発生させた日本列島でありました。

この中で生活する私たちは、昭和20年以降、危険と隣り合わせの中から社会資本整備による被害の減少を確実に得てきたのは事実です。高度成長に伴

う災害の発生との戦いは、昭和の時代を安心安全な国土にするための大きな努力でありました。更に私たちの生活が安心安全を平常のこととして受け入れたまま平成の世に入って行くと、追い打ちをかけるがごとく地球規模の自然災害が襲来してきたのであります。

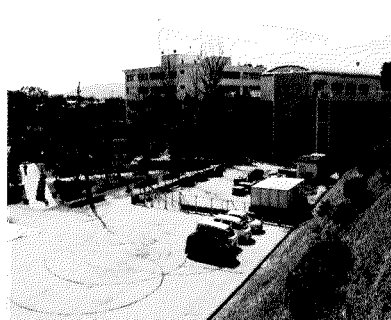
大学における教育研究も、新たな方向性を出すための大きな検討課題として新学科への改組という形で取り組んできました。社会の情勢は情報化が進み、環境問題への取組、デザインの必要性、災害への対応など、ソフト面の必要性が要求されています。これまでのハード面および新たなソフト面を兼ね備えた人材教育の必要性が期待されているところです。ものづくりの技術がさらに優れたものになるためには、技術力の伴ったハード面とソフト面の充実が必要であると考えられます。そのためにも、大学教育の中で取り組む要素は、デザイン力の感性を兼ね備えた広い視野に展開できる卒業生の排出が考えられます。地域に求められる土木技術は、機能が優れた技術であり、デザイン力が優れたものづくりが受け入れられるでありましょう。

平成22年4月からスタートした都市デザイン工学科は、これまでの土木工

学科、建設工学科、都市建設工学科という流れの中においてハード面とソフト面の両立を学び、社会が要求する人材の育成に取り組んでいます。そのためにも本学科の教授陣は、技術面はもとより、環境、計画、情報に優れた若い人材がそろってまいりました。その反面、これまでに卒業生の皆様と共に土木工学科を築いてきました皆田、二神、島の3名が停年退職の時期を迎えました。これも時の流れではありますが、大学は継続して第44期の卒業生を世に送り出します。新たな教授陣と親交を重ね、これまで以上に広土会へのご協力とご支援をお願いしたいと思います。私たちはそのための橋渡しをこの1、2年は継続することを、広島支部の諸兄と話し合ったばかりです。皆さんの力をお借りし、会員諸氏のこれまで培われてきた技術力を、技術者教育の魅力作りにしたいと考えておりますので、益々のご協力をお願い致します。

最後になりましたが、会員の皆様方のますますのご健勝とご発展を心から祈念し、巻頭のご挨拶といたします。

今年もよろしくお願いいたします。



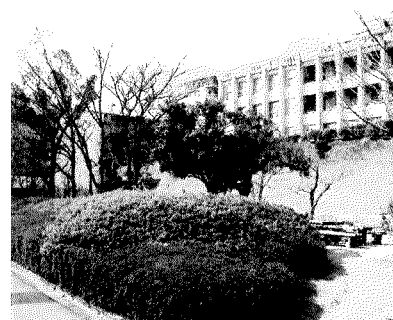
1号館跡地



新歩道橋



4号館跡地



5号館

新任のあいさつ



コンクリートを活かそう

工学部 都市デザイン工学科
工学部 都市建設工学科(併任)
教授 十河 茂幸

専門はコンクリート

2011年4月に着任しました。前職は、株式会社大林組の技術研究所の所属です。企業の研究所では、一貫してコンクリートに関する技術開発を行い、数々の建設現場の技術支援、多くの委員会に参加して社会活動もしました。これらの経験を活かして、広島工業大学の若い力を社会に羽ばたかせる力になりたいと考えています。

企業経験を活かして

建設系の学生は、物造りが好きです。企業での経験を学生に伝えることで社会生活のイメージができると信じています。イメージがないと向かう方向が定まりません。多くの現場を見学させ、そこで体感させることが建設に必要な教育と考えています。先輩の皆様のご協力をお願いします。

出身地は呉市海岸通

家業は石炭商でした。呉市海岸通で生誕し、海を前に、山を背に育ちました。約20年間広島県の空気に触れていましたので、故郷に戻って何か自然な感じを受けています。大学は九州工業大学です。大学院まで6年間、九州で生活し、ここでコンクリートに興味を持ちました。その後、縁あって前職の大林組技術研究所に勤めることになりました。

広土会の発展に期待

広島工業大学に着任することになって、旧知の先輩がたくさんいらっしゃることを知りました。企業最前線で活躍する先輩、役所で社会をけん引する先輩の皆さんに敬服しています。私自身も努力いたしますが、広土会の先輩の皆様におかれましては、さらに大学に足を運んで、学生の指導にもご尽力いただければ幸いです。宜しく願い申し上げます。

退任のあいさつ



44年間の回顧

都市デザイン工学科 教授
島 重章

私が昭和43年4月に本学に赴任してきましたのは、まだ1号館が建築される前の頃でした。3号館の実験棟がやけに大きく感じたのを覚えています。その1、2年後に建った本館と1号館は階段塔を中央に、長い4階建ての白い建物让学生在生皆さんの主たる学びやとなつたのです。あれから44年、頭髪ふさふさの青年は昨年68歳を迎え、

平成24年3月で教授職を去ることになりました。これまでに多くの卒業生の皆さんと過ごした日々が懐かしく思い出されます。

昭和43年4月には土木工学科第1期生が、頼もしくも4年次生として在学してくれたことが、私にとっての新たな勤務先での生活にいろんな意味で勇気を与えていただきました。このときからの関係が未だに続いているのもうれしい限りです。2期生、3期生、4期生との更なる関わりが、私の助手時代の大きな思い出となり、未だに深い交流が続いているのは、私にとって大きな宝であると思っています。

その後、5期生から18期生までの私の講師時代は水工研究室を立ち上げ、水理学と土質工学の境界領域に関わっておりました。新2号館も地上3階建が昭和49年に完成し、その地階には水理実験室が新設され、本学で初めての水理実験を担当したのも、その当時の水工研の諸君との懐かしい思い出であります。夏の隠岐の島キャンプは島ゼミの恒例行事として20年位継続致しました。テント生活でたき火を囲み、星空の下で山のようなサザエ料理に舌ずつみを打ったものです。

19期生以降は、私の助教授から教授時代へととなります。研究分野も水理よりも土質地盤との関わりを扱う研究が多くなってきました。水工研究室から地盤工学研究室と改め、リモートセンシング技術を取り入れたのもこの頃でした。この新技術には新たな装置の導入ができず、卒業研究生たちと共に京都大学大型計算センターへ出張しての研究活動も、いまでは良き思い出であります。

更に時代は平成となり、私は長崎大学へ学位論文を提出する好機に恵まれ、2000年に博士(工学)の学位を授与されましたのも、これまでに私に関わっていただいた多くの卒業生諸君との賜物であると感謝申し上げる次第です。44年間を振り返ると、そこにはいつも学生たちが、卒業生たちがいました。広島工業大学へ来て本当によかったと思っています。皆さま方へ感謝を申し上げますと共に、今後、広土会が皆様にとってより良き会として継続発展しますよう念願いたしまして、私の辞任のご挨拶にかえさせていただきます。



築土構木と生態系で 土木工学(経世済民の工学) を進化させよう！

都市デザイン工学科 教授
二神 種弘

「光陰矢の如し」で、昭和51年4月に広島工業大学(以下では、広工大と記します)に赴任してから36年が過ぎました。紅顔の美少年(?)も、今年3月初めに68歳となり、今年度末で定年を迎えます。

神戸大学大学院修士課程修了後、初めて就職した八千代エンジニアリング(株)で3年間お世話になって退職後、京都大学大学院博士課程に進学し3年間在籍しました。1年間の就職浪人後、神戸大学でのゼミの恩師の松梨順三郎先生の斡旋と、神戸大学元教授の故櫻井季男先生(櫻井春輔広工大元学長のご尊父)が広工大土木工学科の創設教授であり、大学時代の測量学の恩師の故岡野兼夫先生が主任教授であったお陰で、運良く学校法人鶴学園広工大に拾

われ、教壇に立たせていただくことができました。

広工大に赴任にあたり、前にお世話になった八千代エンジニアリング(株)に挨拶に参ったところ、鈴木善三元社長から「同じ誤りを2度しないように」と言われました。その時、「広工大を大切に定年まで勤めよ」と言われているのだと理解し、「どんなことがあっても広工大で定年まで私学教育に専念させていただき、退職する時に鈴木元社長のところにお礼の挨拶に参上するのだ」と決意しました。そして、本年1月27日、「日本建設業連合会の新春懇談会」に出席のため上京した機会に、88歳の鈴木元社長の横浜の自宅を訪問しお礼の挨拶を述べることができました。36年もの長い間一か所に務め元気に定年を迎えることができ、念願の決意の達成ができましたことは、故鶴藁名誉総長、鶴衛現理事長はじめ、広工大教職員・学生・広土会の皆様等関係者の方々のご支援のお陰と深く感謝する次第です。

また、広工大での私学の教育と研究に携わる上でいろいろな問題に遭遇するたびに、校祖の鶴虎太郎先生の残された「鶴虎太郎語録」にヒントを与えられ励まされてきたことを深く感謝致しております。授業だけでなく、学生と一緒に熱中したソフトボールやゼミ旅行をはじめ、軟式テニス部部长、硬式野球部副部长や部長、教職員組合執行委員長を務めることを通じて体験したこと等、数々の楽しい思い出ができました。

さらに、第5回国際境界要素法会議(BEM'83-Hiroshima)およびIMACS/IFAC分布定数系のモデル化とシミュレーション国際シンポジウム(DPS'87-Hiroshima)の2つの国際会議を、C.A. プレビア教授やS. ツザフェスタス教授、砂原善文教授の知己を得、菅雄三・櫻山和男・高松隆夫・西本澄・片山剛之丞・大西和榮・川原睦人・登坂宣好・大橋正和・M. ウイリアムの諸先生、学生、広島YMCAからのセクレタリー等の多数の方々および鶴教育研究振興会・日本万国博覧会記念協会・広島県・広島市・広島市国際交流協会・サタケ技術振興財団・島津科学技術振興財団等の協力を得て、広工大の広島校舎で成功裡に開催できました。これらの成果として、論文集をスプリングァー社およびノースホランド社(エルゼビア社)から出版しました。そのお陰で、土木学会のフェロー会員や特別上級技術者(環境)になりました。また、平成22年度から2年間土木学会の理事にもなりました。これらのことができましたのも、世界で最もよく知られた街の広島にある広工大に永年勤めさせていただいたお陰と深く感謝する次第です。

約20年前、「建設(土木)にもっと生物学を一生物に秘められた大きな力を建設(土木)工学に活かす」をモットーに、思い切って、研究の主テーマを「コンピュータ解析に関する研究」から「生物学的観点を土木に取り入れた研究」にシフトしました。生物の中でも、主に、地盤や土木構造物を力学的に劣化させる微生物(菌)に関する研究をしてきました。研究シフトのため、分子発生学の世界的泰斗の天野實環境デザイン学科元教授(広島大学総合科学部元部長)に大変お世話になりました。微生物(菌)は、栄養分、水分や温度等の増殖活動条件が整うまで活動を停止し、条件が整うと一気に胞子を発芽させる等の活動を行っています。チャンスが来るまでじっと耐えて待ち、チャンスが来たときに持てる力を存分に発揮する微生物(菌)の菌魂(きんこん、microbial spirit)ともいうべき能力に感服しております。踏まれても踏まれても立ち上がる雑草の草魂も大切ですが、菌魂にも見習うべきものがありま



大地と大地に明日を築く・・・

AOKI

総合建設業

① 株式会社 青木組

代表取締役 坂口 慎二

本社 〒722-0035 広島県尾道市土堂二丁目八番十四号(青木ビル)
TEL(0848)23-3131 FAX(0848)22-8371
東京本店 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-4-2
KDX茅場町ビル
TEL(03)3665-9621 FAX(03)3665-9622
営業所 福山・川崎・東北

心の映像カタチにします
建設クリエイター

総合建設業

株式会社 栗本

代表取締役社長 古川 幸雄
〒733-0035
広島市西区南観音7丁目14番20号
TEL (082) 293-8500
FAX (082) 295-8231
【営業所】 岩国市・安芸高田市
<http://www.kurimoto-gr.co.jp>

総合建設業

LANDING

山陽工業株式会社

SANYO CONSTRUCTION CO. LTD.

広島市中区十日市町1丁目1-9 〒730-0805
TEL(082)-232-6471 FAX(082)291-2233
<http://www.landingsanyo.co.jp/>

す。まさに、「草魂も良い菌魂も素晴らしい！」です。

たまたま、日本土木工業協会機関紙の「建設業界（Vol. 59, 2010）の各人各説」への執筆依頼があり、「土木それは生態系！一山川草木悉皆成仏」のタイトルで書きました。このことは、「土木とは何か」とか「土木工学（土木技術者）とは何をすべきものか」を改めて考える機会となりました。

ちなみに、生物学で生態系の定義は、「生物群集とそれを取り巻く環境」となっております。仏教用語に、「国土草木悉皆成仏」があります。「国土」の代わりに「山川」を用い、「山川草木悉皆成仏」とも言います。古来、日本人は山川草木を悉く仏として畏敬の念をもって接してきました。山川草木の山川は国土でもあり、大地すなわち土として環境を表わします。草木は、草木禽獣虫魚とも言われ、生きているものすべての生物群集を表します。草木の木は1字で生物群集を代表すると言えます。したがって、山川草木は土木であると共に生態系を表します。これからの土木は「生態系としての土木」も考慮することが重要です。もともと、土木の語源は中国古典の淮南子の「築土構木」に由来すると言われてきました。これは、物づくりに必要なコア技術を大切にす従来土木です。しかし、地球環境共生の時代とも言われる21世紀は、「築土構木としての土木」を基本に「生態系としての土木」も取り入れた「新しい土木」を造り上げていくことが益々重要となります。

また、「土木技術者はどうあるべきでしょうか」。高橋裕東大名誉教授は、「民衆のために生きる土木技術者」をよく唱えています。土木技術者は、言わば、民衆のために生き世の中を健全に運営するために役立つことをする者ということで、「経済」の語源の「経世済民」の語を使えば、「経世済民の技術者」と言えるでしょう。土木技術者は誇りを持ち、「築土構木と生態系で土木工学（経世済民の工学）を進化させよう（簡潔に、築土構木と生態系で土木を進化させよう）！」を実行し、社会に貢献する仕事をすべきだと思います。このように、本来、土木技術者の仕事は世のため人のために役立つやりのある誇りの持てる仕事です。なお、「土木学」の提言に関し、竹内良夫監修・柏原英郎編著の「築土経国」(山海堂)があることを付記します。

仕事に惚れる、土地に惚れる、人に惚れるということ三惚れと言うように、人情豊かで風光明媚な広島・三宅の地の広島で、多くの方々に出会い、好きで誇りある土木の教育と研究の仕事に長期間従事でき、大変幸せでした。

定年後は、平成23年度から3年間研究代表者となって進めている科学研究費補助金研究（一般（B））の「地盤生態系の富栄養化による微生物活動が促進する力学的劣化と地盤災害の誘発シナリオ」を、研究分担者の酒井久和建築工学科准教授と角川幸治健康情報学科准教授、および連携研究者の櫻井春輔広島大元学長（国際岩の力学学会会長）と藤原靖大成建設（株）技術センター室長等の協力を得て続けます。また、「建設（土木）にもっと生物学を！」のモットーを進展させると共に、進む勇氣と退く勇氣を合わせ持ち、是非やりたかった夢の実現のために、F. バックのアニメーション「木を植えた男」の主人公のジオノ老人のように努力して参る所存です。やりたかった夢に、【1）語学の勉強（英語・フランス語・ドイツ語のブラッシュアップとサンスクリット語・ラテン語・中国語等の学習）、2）自然エネルギーの開発利用（経済水域200カイリの活用による潮流発電に関するコンピュータ解析）、3）自然農業の実施】等があります。これらの夢を目指した結果、世話になった瀬戸内地域の活性化に、少しでも貢献できれば

幸甚です。

最後に、京都大学大学院で博士論文の指導と審査をしていただき終始温かく見守って下さいました末石富太郎先生と故岩井重久先生、および上京した際にいろいろと激励して下さいました故林泰造先生（国際水理学会元会長）と玉井信行先生（国際水圏環境工学会元会長）に心から厚く御礼申し上げます。皆様、長い間いろいろとご支援下さいまして誠に有難うございました。重ね重ね厚く御礼申し上げますと共に、益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



第5回国際要素法会議での開会式後の集合写真



退任の挨拶

都市デザイン工学科 教授
皆田 理

広士会会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて、平成24年3月で広島工業大学を停年退職いたします。振り返りますと昭和42年に広島工業大学土木工学科に着任して45年間大変お世話になりました。

昭和40年代は戦後の高度成長期の後半でしたが、田中角栄の日本列島改造論で土木業界は右肩上りの成長業界でありました。自身も若いこともあり、教育・研究も充実しておりました。その後、経済も安定期を迎えると土木業界は3K（きつい、危険、汚い）の職場ということで若者の土木離れがおき、土木工学科への受験生も減り、土木学会も土木という名の変更を検討し、大学では土木工学科の名称変更が始まり、現在では大学で土木工学科の名称が残っているのは数校のみです。昭和も終わり、バブル経済も崩壊し、公共事業削減、談合等でイメージ低下に加え、土木業界はあたらしく新3K（給料が安い、休暇が少ない、カッコ悪い）が加わり6Kとなり、ますます若者の土木離れが進み、受験生も減り、この時代に主任教授、また工学部長を命ぜられ、晩年は、教育・研究よりも学生確保、学科の存続のために尽くしました。今思えばこの時代が1番大変でした。

昨年、東日本大震災が起き、大津波により一瞬で人、家、物がなくなり、あらためて自然の恐ろしさを感じました。また、土木事業の大切も再認識しました。この大震災にこれからの土木業界の進む道があるように思います。卒業生、教員の皆さんこれからの土木業界の進むべき道を模索していることと思いますが、道が見えればあとは進むだけです。卒業生が一致団結し、これからの日本、土木業界を支えていってほしいと思います。

最後に、広島工業大学では、有意義な教育・研究生活を過ごさせていただき、多くの卒業生の方々と出会ったことが私の財産です。大変感謝しています。これからもよろしくお願い申し上げます。

支部だより



準備が大切

関西支部長

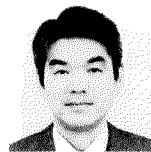
川岡 靖司（14期生）

昨年平成23年には、3.11の東北地方太平洋沖地震による大津波、引き続き発生した原子力発電所の事故、さらには8月の台風12号による土砂崩れによって発生したせき止め湖といった、これまでに経験したことのない災害に見まわれ驚愕の連続でした。被災地の皆様には、一日も早い復旧・復興をお祈り申し上げます。

仕事を進めるにあたって前段取り（準備）が大切だと上司・先輩から指導され、実践しているつもりです。日頃から、後進にもしっかりと準備するよう指導していますが、昨年の被災報道を見聞きする中で、私自身、災害に対する準備ができていないことに猛省しました。例えば、近隣のハザードマップを見たことがなかった、避難勧告や避難指示の意味を知らなかった、など……。災害に対して、平時から情報を入手し、災害発生時の適切な行動につながるよう準備しておきたいと思っていますところ。

さて、関西支部では、平成23年10月2日に関西支部総会を開催し親睦を深めました。今回は、広士会副会長の大東先生に出席頂き、大東先生が準備してくださった「広島工業大学辞典」を拝見しながら、学内の様子や就職対策など興味あるお話をお聞きし、学校とOBとの距離を縮めることができた会となりました。出席者が2期生から42期生までの世代差から、学食環境の違いで大いに盛り上がりしました。

関西支部では、4月第一日曜日の「花見（阪急夙川駅前11：00集合）」と秋の「総会」を行っています。「総会」については、予定をつけやすく場所に迷わないよう、今年から開催日時と場所を固定することになりました。詳細決定しましたらご案内しますので、ご参加のほど、よろしくお願い致します。



広島支部長を拝命して

広島支部長

橋國 雅文（13期生）

私は昭和56年卒業の橋國です。広島市役所に勤務して満31年になります。

最初の職場は下水道局で下水管きよの整備に携わっていました。当時は政令市になったばかりで、下水道普及率も現在の約93%に対して当時は30%を僅かに超えた位だったと思います。そのため、今とは違いどんどん事業費が増えていく時代だったので、日々工事発注に向けて設計積算に追われていたように記憶しています。現在は環境局で一般廃棄物最終処分場の建設に携わっており、昨年3月に発生した東日本大震災の復興に向けたガレキ処理で処分先の確保にご苦労されている状況を見ますと、最終処分場の確保がいかに重要かということを改めて考えさせられながら、業務に取り組んでいます。会員の中には、災害復興に



株式会社 神崎組

取締役社長 神崎 文一郎

本社 姫路市北条口三丁目22番地
TEL 姫路(079)223-2021(代表)
FAX 姫路(079)281-8191
支店 大阪

明るく伸びる



株式会社 伏光組

代表取締役 伏見 光暁

本社 〒734-0013 広島市南区出島1丁目33-61 TEL (082)253-6161
FAX (082)254-4581
支店 松江 宮葉所 三次・安芸高田・世羅・益田・東広島

KATO
Construction Co., Ltd.



株式会社 加藤組

〒728-0013 広島県三次市十日市東一丁目8-13
TEL (0824) 63-5117 FAX (0824) 63-5100
http://www.kato-gr.com

び尽力されている方もいらっしゃるかと思います。健康には十分ご留意され、益々のご活躍を期待しております。

さて、広土会広島支部では、平成 20 年に開催した創立 40 周年記念事業の実行委員長を務められた前支部長の森川泰雄先輩（7 期生）が来年は定年を迎えられるということから、次の創立記念事業を見据えて世代交代を図ることになり、昨年 8 月の広島支部役員会において新体制が承認され、不肖ながら私が支部長を務めさせて頂くことになりました。よろしくお願い致します。

私自身、広土会の運営には、大学を卒業して以来、ほとんど関わっていませんでしたが、平成 20 年に宮川先輩（7 期生）から 40 周年記念事業の実行委員を頼まれ、平成 22 年には広土会の監査役を堀内先輩（7 期生）から引き継ぎ、今回は、以前仕事をご一緒させていただいたことのある森川先輩からの推薦と、次々と 7 期生におだてられて何が何だか解らないうちに支部長にまでなってしまいました。とは言え、こうして先輩方に声を掛けて頂けるのも、広土会という繋がりの中で、様々な場面で心安く話をさせて貰い、何かと助けて頂くと同時に、先輩からも自分を信頼して貰っているのだと感謝して、引き受けさせて頂きました。その際、以前から幹事として支部の事務局を務めている後輩からも「段取りは私達がするので、心配しないで下さい。」と非常に頼もしい言葉を頂きましたので、とても心強く思っています。大したことは出来ないのですが、余り緊張らずに広土会のお世話をさせて頂こうと思います。

最後になりましたが、広土会が今後益々発展し、会員の皆様方がより一層ご活躍されることをお祈りし、挨拶に替えさせて頂きます。



橋を架ける、夢も架ける

広島西支部

登田 宏史（14期生）

学生番号 534096、14 期生の登田です。合併して社名が変わりましたが、三井住友建設㈱に 30 年間勤めています。

現在、備前焼で有名な岡山県備前市の東端、日生（ひなせ）の地において橋梁の建設工事に就いております。本土と鹿久居島（かくいしま）間の海上 765 m を結ぶ区間に架設される渡海橋です。橋梁形式は「P C 3 径間連続エクストラード橋+P C 3 径間連続箱桁橋」で、航路部分の最大スパンは 170m となり、国内で 9 番目を誇ります。

架橋地域は牡蠣の養殖が盛んで、最近では全国の B 級グルメの頂点を決める「姫路 B 1 グランプリ」決戦において、地元の「カキオコ」（牡蠣入りのお好み焼き）が見事に 9 位入賞を果たし、観光にも資する重要な資源となっています。養殖は諸島地域が基地となっており、架橋により流通の向上と地域の活性が期待され、住民の悲願となっています。

架橋地周辺では養殖筏の移動が頻繁に行われ、海流や水質の変化が牡蠣の成育に影響します。また同時に各離島間の連絡船や小豆島への定期観光フェリー、漁船の航路でもあり、船舶の運航にも支障が出ないよう、漁協と関係先との調整が必要です。

技術者として橋を架ける場合は、設計図書に従い確実な施工を完遂すれば合格となります。しかし、広土会出身の

我々技術者は、地域特性と構造物の特徴に配慮して物作りを行います。発注者と使用者に安心と感謝の念を抱かせることが技術者の努めだと思います。具体的な対策として、渡海橋の特徴に着目すれば L C C の縮減が大きな課題となります。可能な限りメンテナンスフリーの橋梁とするため、設計図書に従うのではなく、別な方法はないか検討します。出来る限り鋼材の使用を削減すること、表面に鋼材を露出させないこと等です。より良くなれば、設計で決まったことでも変えることは可能です。信念を持って挑戦しましょう。また、工事に伴い環境への影響は必ず生じます。地域特性に着目すれば、何が一番重要か？ここでは基礎施工時の濁水、排水の扱いです。鋼管井筒基礎なので躯体施工時は締め切られます。通常では井筒構築後に濁水処理で十分と考えますが、ここでは更に基礎工部分を仮設の鋼矢板で締め切りました。井筒施工時の濁水を拡散させない工夫です。当然、周辺は汚濁防止膜により遮蔽していますが、潮流により拡散を防止することは出来ません。結果として、汚濁防止膜の機能が不要な程に改善され、漁協関係者からも絶大な評価を得られました。

国内も海外情勢も不安定で先行きが不透明なこの頃ですが、各支部と会員皆様の活躍と活動を通して共に連携し、広土会が 50 年、100 年続くよう盛り上げましょう。



今年こそ、 支部長会議を三次で！

広島県北支部長

國原 定明（10期生）

はじめに、東日本大震災により被災されました皆様に、心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

そして、昨年は、第 20 回支部長会議を私たち県北支部が幹事として開催を予定しておりましたが、残念なことに台風 12 号の襲来で中止となりました。当日は、本部より 4 名、各支部より 9 名の出席を頂くようになっていました。

私たちの県北支部総会も同日開催し、支部長会議後の合同懇親会を盛り上げようと支部会員 20 名出席を予定していましたが台風の影響で欠席者が増えました。

支部長会議は中止となりましたが、第 22 回県北支部定期総会は参加者 16 名で、予定通り三次グランドホテルで行いました。はじめて、来賓の居られない寂しい総会になりましたが、嬉しいことに、今年初めて総会に現役学生が参加してくれました。県北支部の加藤雅規副支部長（17 期）の職場（加藤組）にインターンシップとして実習に来られた、水野健太君（都市デザイン工学科 3 年生）が出

席してくれたことです。懇親会では、先輩たちとの歓談中でもメモを取りながら話を熱心に聞くので、卒業生も熱弁に益々力が入っていました。私も 3 年生の時、学生幹事長として広土会本部が広島支部の懇親会に緊張しながら参加したことを、そして初めて和田一雄先輩（前県北支部長）に出会ったことを思い出しました。

昨年、広島のある大学祭に行く機会がありました。1978 年に卒業して初めてでしたが、私たちの頃とは、違って飲食のバザーばかりが目立ちました。（ただ、東日本大震災へのボランティアの発表や関連バザーはありました。）

私たちの頃は、広島市内（県庁から本通りを通り平和公園まで？）をワンダーフォーゲルの赤ふん踊りや応援団を先頭に各クラブ・サークル・各学科毎がパレードをしました。土木工学科も広土会が中心となり酒を飲みながら神輿を担いだものです。

学科展では、石原裕次郎主演の「黒部の太陽」を上映したり、当時、湯来町に建設されていた魚切ダム の付替道路橋の模型を徹夜で 3 橋制作し展示したことを思い出します。製作のための資料を伏光組の先輩や県の工事事務所の先輩に協力していただきました。

広島工大から土木工学科の名前が幾つもあり、土木系の学生が 40 ～ 50 名に減り、さらに、私たち卒業生が大変お世話になった島先生、皆田先生、二神先生が本年退職され、来年は、中山先生も退職されるそうです。広土会も新たな時代を迎えようとしています。世代間の交流を図り、大学の教職員・在校生と卒業生の交流や意見交換の場を設け、さらに、本部と支部の連携が重要になってきます。

最後に中止となった支部長会議を今年こそ、“中国地方のへそ”である三次の地で是非とも開催させて頂きたいと思います。本部役員・各支部役員の皆様皆様のご参加をよろしくお願いします。



近状報告

県東部支部 ㈱青木組

真鍋 豪志（43期生）

私は平成 23 年（2011 年）卒業の真鍋と申します。今は広島県尾道市に本社を持つ株式会社青木組にて仕事を行っています。私がこの会社に入り今の現場を含めると 3 つの現場で物が造られていく過程に携わってきました。物が完成していく様を見るのはとても嬉しくその仕事に自分も携わっていると思うととても喜ばしく感じます。しかしながら、物が造られていく過程に携わってきて、物が完成されていく喜びや、楽しさの他に仕事に対する難しさや、大変さというものも実感しました。初めて目にする機械や工具、初めて耳にする土木用語など最初の頃は覚えることの多さに戸惑いこの仕事を続けていくことができるのか不安になったこともあります。ですが、この 10 カ月間仕事を行ってきて先輩方から色々なことを教えてもらい、また分からないことがあれば積極的に聞きに行くことで最初の頃と比べるとだんだん仕事にも慣れ、仕事に対する楽しさというものが芽生えてきました。今でも分からないことはたくさんあり、覚えたことよりも覚えることの方がまだまだ多く大変なことに変わりありません。しかし、実際に現場へ出てどのようにして現場が動き、どのようにして物が完成していくのかを体験することで今まで知らなかった

総合建設業

 **占部建設工業株式会社**

代表取締役 **占 部 誠**

本 社 〒720-0816 福山市地吹町18番16号
TEL(084)922-1254 FAX(084)922-1276

広島支店 〒738-0004 廿日市市桜尾二丁目8番3号
TEL(0829)32-1224 FAX(0829)32-8779

井原営業所 〒715-0022 井原市下出部町二丁目22番4号
TEL(0866)67-1300 FAX(0866)67-1215

広島営業所 〒731-5135 広島市佐伯区海老園4-4-44
TEL(082)921-2617 FAX(082)921-5443

道路埋設指針

建設大臣認定擁壁

P C ボックスカルバート ザ・ウォール (H=5.0m)

 **株式会社 マシノ**

本 社 〒733-0822 広島市西区庚午中1-19-23 (082) 507 - 2757 (代)

東広島営業所 〒739-2312 東広島市豊栄町別府270 (082) 432 - 4132 (代)

福 山 支 店 〒720-0805 福 山 市 錦 門 町 2-5-39 (084) 925 - 8855 (代)

山 口 支 店 〒754-0002 山 口 県 山 口 市 小 郡 下 郷 1130 (083) 973 - 3533 (代)

山 陰 支 店 〒695-0003 島根県江津市松川町下河戸188 (0855) 55 - 0124 (代)

本 店 〒699-5133 島根県益田市神田町口615 (0856) 25 - 2380 (代)

工 場 広 島 ・ 江 津 ・ 益 田

「技術」と「感性」と「誠意」をもって
造り上げる高品質の印刷物。



株式会社 インパルスコーポレーション

本社・工場／〒733-0012 広島市西区中広町1丁目16-24
TEL(082)234-2221(代) FAX(082)234-3318
E-mail impulse1@imp-h.co.jp

東京支店／東広島営業所／岩国営業所
http://www.imp-h.co.jp

ことを知ることができ、自分が日々成長していっている
と実感することができます。これは大学の授業では決して教
えてもらうことができないことであり、現場の空気を体験
することでしか身につかないものだといふことができたし
た。

今年には2級土木施工管理技士の試験を受けることがで
けるので、まずはそれに無事合格することを目標に頑張っ
ていきたいです。そして、行く行くは1級土木施工管理技
士の資格も取りどのような現場でも任せられるようになり
たいです。今はまだ、経験が少なくその段階に進むにはま
だまだ時間が掛かりますが、日々の勉強を怠らず一緒に仕
事をしている人たち全てに一目置かれるような人物となり
たいです。

広島工業大学に入学したおかげで今の会社に就職するこ
とができたので広島工業大学の4年間で学んできたことを
決して無駄にはせず今の会社でもその知識を十分発揮し
会社に貢献していきたいと思っています。

まだ入社して1年も経っていませんがまだまだこれからでは
ありますが、自分自身の可能性を信じてこの仕事に勤めて
いきたいです。



支部だより

島根県支部

岩井 卓二（25期生）

平成23年11月5日（土）に松江市内で総会および懇
親会が開催されました。

参加者は16名、広土会会長の島重章先生にご出席をい
ただきました。

総会で一年ぶりに会う会員、頻繁に会っている会員、ゆっ
くり話すことができ大変楽しい時間を過ごすことができました。

島先生からは、工大の近況報告を聞かせていただき、大
変なつかしく学生時代を思い出しました。

島根県支部では、毎年総会および懇親会を行っています。
参加者は、30名を越えた年もありましたが、例年20名
前後となっています。

会員は、東は安来、西は益田および津和野、隠岐郡（離島）
と県内全域に居住しておりますが、出雲から東部の居住者
が多いこともありほぼ毎年松江市内で開催されています。

私は平成5年11月に初めて総会に参加させていただきました。

24歳の私は、「若い!」「俺たちが工大生の時に生まれ
たのか!」と当時40歳代の先輩方々から言われたことを
今でもはっきり覚えています。

その後、月日が過ぎるのははやいもので私も42歳、小
糠支部長（2期生）、福田支部長（6期生）が勇退され原
支部長（10期生）が3代目支部長をされています。と同時
に、総会、懇親会に20歳代の若い会員を見かけるよう
になり嬉しく感じております。

支部総会に若い会員、これからの卒業生がどんどん参加
してくれることを祈っています。

島根支部がある島根県ですが、広島市のような大きな都
市はありませんが、海と山、自然に恵まれた静かなところ
です。

映画、テレビドラマのロケ地になった場所、温泉、観光
地も数多くあります。

全国的に有名な出雲大社では、現在、御屋根葺替・修理
工事が行われており、御修繕が整う平成25年5月に本殿
遷座祭が行われます。（平成の大遷宮）

高速道路の整備もすすめられており、平成24年度には
三次から松江まで高速道路がつながり関西方面、九州方面、
四国方面、広島方面からすべて高速道路で松江まで来るこ
とが可能となります。

所要時間も短縮されますので皆様方が遊びにこられるこ
とをお勧めします。

最後になりましたが、広土会の益々の発展と会員皆様の
ご健勝、ご多幸をお祈り申し上げます。



私の人生

阿讃支部

岡部 正人（13期生）

私は、広島工業大学土木工学科 第13期生 岡部正人
と申します。

今は、保険の営業をしています。

どうしてって、思うかも知れませんが、広島工大を22
歳で卒業して、今は、もう53歳です。そして、故郷の香
川県観音寺市に住んでいます。

人の人生って、不思議なものだと思つづく思います。

観音寺に生まれ、小学校、中学校、高等学校を地元で過
ごし、18歳から広島工大で大学生活を送り、大学の教員
を3年経験しました。

その後、観音寺に戻り、地元企業へ入社し、営業で26
年間、北陸、中国、四国、近畿、東海、東京を巡り、会社
都合での早期退職を経験して、たどり着いたのが、地元の
保険の営業でした。

大学の時は、サイクリング部で、日本全国を旅して、就
職をしてからは、営業で日本全国を回り、今は、人の人生
と向き合う仕事で、全国を回っています。

先日、小学校の時の担任の先生の自宅へお邪魔しました。
先生は、もう79歳で、“歩くのも大変なんだよ”って言
いながら、ゆっくりゆっくり歩いて、玄関まで私を迎えに
来てくれました。そして、私を見るなり、岡部君元気かいっ
て言ってくれました。

私の人生の53年間は、全国での多くの人との出会いが
あり、私の生きて来た証としての財産になっています。

昔は、人生50年だったそうですが、今は、80年です。

今の仕事は、希望すれば80歳まで働けるそうですので、
後30年の後半の人生を、人との出会いを楽しみに、今の
仕事で、皆さんの人生のお手伝いをさせて頂ければと思い
わくわくしております。

卒業生だより

3期生40周年記念

(株)増岡組

河原 不二夫（3期生）

2011年は、3月11日に発生した「想定外」の大地震
と大津波に「起きるはずのなかった」原発事故が加わった
東日本大震災の発生に始まり、野田内閣の発足とTPP問
題、長期金利と株価の低迷に終わった忘れる事の出来ない
1年であった。

震災の犠牲者に、謹んで哀悼の意を表する次第である。

さて、3期生は毎年、広島県内を中心として、山口県周
南市まで20数名で連絡を取り合い、夏の暑気払いと冬の
忘年会の年2回集まり懇親会やゴルフを行っている。

世話役は、永久幹事を自認している奥川氏。連絡係の大
村、坂原両氏と私がヒモでくっ付いている。

その奥川氏が、「今年は卒業して40年だけど、どうす
る?」っていう一言からこの会は始まった。

前回の35周年の時、「次回の幹事長は俺がする」と大
見得を切ったのは大村氏。もちろん幹事長は大村氏で決定。

まずは、日程と場所であるが、場所は私が良く知ってい
る鯉城会館で内諾を得て、直ちに会場を確保した。
ところが、日程が以外と揉めた。

35周年は、5月の連休だったが、「仕事上、何かと都合
が悪く休めない」ということ（皆さん現役。働き盛り?）
で参加できないという意見が多かったが、「還暦を過ぎた
年寄りには、結構時間が自由になるし、お盆休みにすれば、
これまで参加できなかった人が出席できるのでは」という
ことで、8月13日土曜日に決定。

大学からは、皆田教授、島教授をご招待し、勿論鈴木元

教授もご招待することも合わせて決定した。

案内は、全員に送ったかったが、住所不明者が多くある
ことから、35周年に連絡して返信をくれた者90名に限
ることにした。この会誌を見られて、自分の所に案内が届
かなかった人は、そういう事なのでゴメン。

当日は、先生方3名、卒業生28名の31名で、大村幹
事長の挨拶から始まり、盛大に開催した。

幹事長の挨拶の後、先生方に一言お願いをし、大学とご
自身の近況報告を頂いた。中でも鈴木元教授からは、現役
時代に勝るとも劣らない名調子で当時が思い出され、先生
がお元気である事を大変嬉しく、今後もご健勝であることを
祈った。

会場の鯉城会館の良い所は、集合写真を撮影後その日に
全員にサービスしてくれることである。



当日は、お盆の最中ということもあり、2名が渋滞には
まり遅れて到着し、この集合写真に間に合わなかったのは、
残念であった。

続いて会は、恩師への花束送呈を行い、最遠来者である
埼玉県からの幸田氏による乾杯で懇親に突入。参加者全員
からの近況報告、欠席者からの返信コメント紹介、余興、
大学から頂いた記念品の配布、第2遠来者である千葉県
からの今澄氏の次回への抱負と進み、元ワンゲル部の近藤
三次市議の音頭による全員での「工大節」の大合唱。

今回は、70歳の古希? 77歳の喜寿? 「生きているか
な~」って言う言葉が飛び交っていたが、「生きているう
ちにやろう」ということで、70歳の古希。6年後の再会
を誓って幹事長の閉会挨拶で幕。

アツという間の3時間で、2次会へと流れて行った。

私自身を筆頭に皆さん40年前の好青年、やんちゃ坊主、
そして優しく面倒見の良い先生方に帰った時間であった。

最後に、快く幹事長を引き受けてくれた大村氏。事務方
での取りまとめなど配慮のあった坂原氏。いつも皆の代表
格の奥川氏。大変お世話になりました。これからも、引き
続いてよろしく願いする次第である。

文責：河原不二夫（写真：前から3列目向かって右端）



災害地の支援報告

第一復建(株) 技術本部

岡崎 研児（5期生）

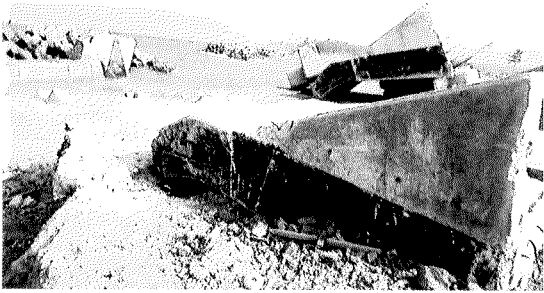
1. はじめに

私は広工大土木工学科を昭和48年に卒業し、地元の建
設コンサルタント会社に38年間勤め、昨年の3月末に退
職しました。定年を間近に控えた3月11日午後2時46
分、東日本大震災が起き、未曾有の大災害をもたらしまし
た。大津波の来襲する状況をテレビで見て、長い間沿岸の
設計業務を生業にしたお返しに、何か自分にできる事は無
いかと思っていました。4月初旬に仙台のグループ会社か
ら出向要請があり、5月初旬から半年間、主に沿岸の復興
支援の経験を得る事ができました。本稿では、主に沿岸の
津波被害の概要と、携った業務の内容、派遣中に感じた
ことなどを述べたいと思います。

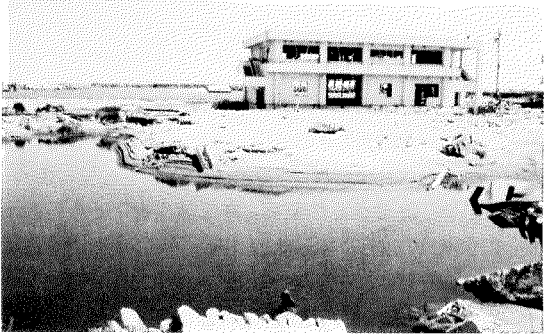
2. 津波による被害の概要

広く報道されているとおり、津波被害は北海道から沖
縄まで及んでおり、約2万名の死者行方不明者、全壊家
屋9万戸、被害漁船2万隻強等、甚大なものでした。特

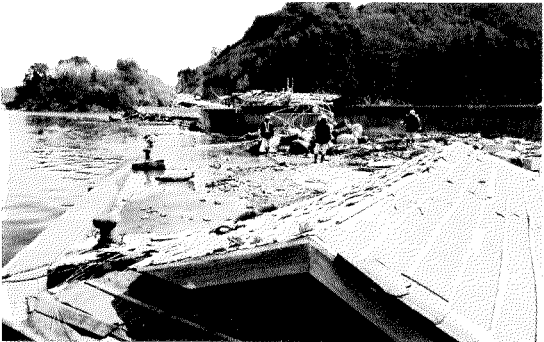
に、福島／宮城／岩手県沿岸は壊滅状態の市町村があるなど、海岸／港湾／漁港等の沿岸施設は大きな災害を被りました。津波高（海水面から津波表面までの高さ）は、三陸沿岸では最大 15 m 以上、仙台湾以南から福島県で 7 ～ 9 m、茨木／千葉県沿岸で概ね 5 m 程度と報道されています。現地を確認した中では、陸前高田市、南三陸町、女川町、石巻市雄勝町、福島県新地町など、原爆被災後の広島／長崎を想起させる状況でした。



地元で聞いた津波時の状況を、以下少し紹介します。
①所属漁船のほとんどは地震後すぐに沖合へ出て、津波を乗り切って生還した。沖に出た船の内 3 隻が被災した。沖に出なかった船は、岸に打ち上げられた。（漁港背後の小高い丘の上で漁船を確認した。水産庁では漁船が沖合避難する場合、津波の影響が無い深さとして－ 50 m 以深を推奨している。H/23/5/18、釣師浜漁港）

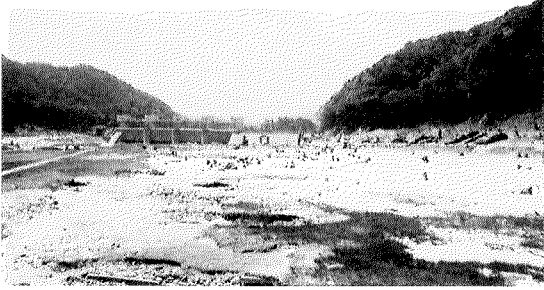


②津波の高さは海面上 30m あったと思う。第 1 波は 3 時 25 分頃、第 2 波は 1 波が収まりきらないうち、3 波は 2 波の 10 分くらい後に来襲した。第 3 波が最大で、1 波・2 波では家も残っていたが、3 波で家も全てやられた。3 波目の直前の引き波時は、対岸の明神地区まで干上がって海底が露出した。（津波高 30 m は見た人の感覚であるが、湾内でのせり上がりの激しさも感じさせる。H23/6/2、雄勝港唐桑地区）



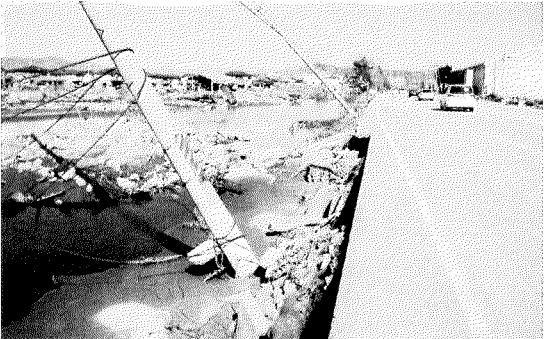
③普代村を襲った津波高さは国土交通省正式発表では 21.5 m、津波は高さ 15.5m の普代水門の越流堰天端を 5 m 程度オーバーしたが、水門から 200 m のところ

で止まり、堤内の街中では家屋被害も無かった。（越流原因以外で、町民 1 名死亡）（普代水門は、明治／昭和 三陸津波での大規模な人的被害を受け、35 億円の工事費をかけて S59 年に完成した東北一の津波水門。当時無駄遣いの意見もあったが、多くの人命を守った水門として、一躍有名になった。H23/7/12、岩手県普代村役場） ＊注：カッコ内は、岡崎のコメント。



3. 携わった業務の内容と復興の状況

私の専門分野は、沿岸域の調査／計画／設計／管理であり、出向したグループ会社が行う沿岸施設（海岸／港湾／漁港）の復興計画・災害査定設計（復興予算確保のための概略設計）の技術指導や現場調査支援、発注者や社外支援先との協議、調整などが主な任務でした。関わった地域・施設は、南から順に、福島県釣師浜漁港、仙台湾南部海岸、塩竈市松島地区海岸、松島町手樽海岸、東松島市東名海岸、石巻港、女川町復興計画、雄勝漁港／雄勝港、南三陸町管内漁港、気仙沼湾口橋梁計画、岩手県普代浜復旧などです。沿岸施設の災害査定は 23 年末に終わりましたが、「遅々として進まず」の感想を持っています。



現在宮城県では、仮設住宅 2.2 万戸で人々が生活し、被災した漁業者は早期の漁再開を望んでいますが、漁船確保、陸揚げ施設・市場・冷蔵施設・加工施設などの復興が遅れ、原発事故の風評被害もあって、なかなか海に出られない状況です。復興の第一は、「働ける場所の確保」であると思っています。

4. 支援業務を通じて感じたこと、留意したこと

4 月 11 日から 15 日までの一次調査時には、石巻港、東名海岸、北上川河口部左岸、釣師浜漁港等を視察しました。津波被災一ヶ月後の状況は声を失うばかりで、自分の能力で本当に支援ができるのだろうか？不安な気持ちになりました。出向先の沿岸担当グループは、震災後無休で働いており、グループ会社（復建調査／第一復建）を挙げての支援が必要なことも良く分かりました。その後長崎に一度帰り、会社宛の支援体制提案と引継ぎを行い、長崎から福岡への転居等を済ませて、5 月 6 日に女房と一緒に仙台入りしました。支援業務で心掛けたのは、「現地で、実際の被災状況を見て、地元の人に話を聞く」事です。製造業などでもよく言われることですが、「問題の答えは、現場にある」と思っています。また、休日に開催される「地震・津波関連の報告会やシンポジウム」には極力参加し、地元新聞の災害報道を切抜くなど、情報収集と知識習得に努めました。仙台に行くまでは、津波やその被害は写真や動画で見た経験しかなく、発生メカニズムも良く分かりませんでしたが、おかげで理解度もあがったと思います。

5. おわりに

還暦になって今回の経験ができたことは、土木技術者として幸運でした。複数の同期生から、励ましと羨望のコメントも貰いました。自分の技術者人生は、好調な経済情勢下、公共投資にも恵まれ、概ね順調だったと思います。現在、財政悪化・公共投資批判等、建設業界は冬の時代を迎え、若い人の土木離れも目を覆うばかりです。今後は、建設コンサルタントの仕事を継続し、煩がられるのを覚悟して、若い世代に、「土木は、人生を捧げるに値する仕事」であることを、伝えて行きたいと思っています。そのためには、「教育は共育をモットーに一生勉強」を心がけ、現場に立ち続けることが、肝要だと考えています。最後に、広島工大の恩師や諸先生方、同窓・同期の諸氏、会社の先輩や同僚、苦しい時にいつも話を聞いてくれた女房と家族に感謝しています。



事務局だより

広土会の活動は会員の会費納入で運営されています。会費未納あるいは期限切れの方はこの点を御理解いただき、会費の納入をよろしくお願い致します。また、広土会新聞は会員の情報誌です。今年度は、4 期生－40 周年、14 期生－30 周年、24 期生－20 周年、34 期生－10 周年を迎えます。記念祝賀会等を行われる場合には事務局にご連絡をいただければご協力いたします。皆様からの情報、ご意見、ご感想をお待ちしております。FAX、またはメールでご連絡下さい。

FAX（082）921-8976 E-mail：kodokai@cc.it-hiroshima.ac.jp